詩を読む人のために

三好達治著

詩を読み詩を愛する者はすでにして詩人であります。著者（1900－1964）はこう読者によびかける。そのうえで，読者を縛らずにどう詩のふところへ誘うのか。それは，藤村・泣菫・白秋から，朔太郎・中也ら様々の詩を例に，自分の読みとり方を自己に即して語ることであった。著者の，詩を読む感動が，そのまま伝わってくる好著。（解説＝杉本秀太郎）

緑 82-3
岩波文庫

詩を読む人のために

定価はカバーに表示してあります

1991年1月16日　第1刷発行©
1994年11月15日　第11刷発行

著　者　三好達治

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・三陽社　カバー・精興社　製本・桂川製本

ISBN4-00-310823-X　　Printed in Japan

岩 波 文 庫

31-082-3

詩を読む人のために

三 好 達 治 著

前書き

この小さな書物は詩を読む人々、それも初めて現代詩を読もうとする年少の読者のためにという、書店の依頼によって筆を執りました。この種の解説者として私のような人間はどうやら適任者でないらしく、執筆の途中もしばしば考えましたか、たた一つ私が以前からその折々に読みつづけてきたさまざまな作品の、その折々に感動あるいは感興を私に覚えしめた跡をたどりたとり、もう一度私の過去をふりかえってみるようなつもりで稿を進めました。誰かもいったように、詩を読み詩を愛する者は既に彼が詩人だからであります。既に彼は詩人でありますから、独りで合点し独りで納得することを喜ぶでしょう。そばからとやかく解説なとを加えてもらいたくないのがこの種の人物の特色であります、それはもうその通りなのであって、人の手引によってようやく詩を理解し、まして詩を愛するという段どりにはたいていの人間が、――つむし曲りたからというのではありません、そこのところを我流にやってみなければいっこう面白くないのが詩という文芸の本来でありますから、――さよう注文通りに段どりよくは参りますまい。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れはそれでいいのであります。こう考えてくると私は私のこの小さな書物の使命をどこにおいていいのか戸惑わざるをえません。ただ今稿をおわって筆をおくに当って私はなおその疑問からまぬがれないでいるのであります。

私は先にもいったように、私の過去をこの書中でふりかえってみることをしました。私の過去をただ今の私の位置から考え直してみることをしたのでありますから、これは私の場合一つの後日の、それを一まとめにやってみた納得のしなおしという形にもなりますので、多少の整理と理由づけとを伴う形になりました。それをついでに、といってはたいへん失礼な、また無精者のいい草らしく聞えそうな次第になりますが、正直にいいますと全くのところ、それをついでのことに、多少は年少諸君の耳にも聞きとってもらいやすい平易な、時にはくだくだしい言葉に置きかえ置きかえ、多少の説明を補足して書き綴ってみました。詩を理解する心情の本質というものは、そのぎりぎりの点では、さほど年齢の支配をうけるものではあるまい、というのが私の考えでありますから、私はこういう「ついでのことに」をやってみようとしたのであります。詩はおしつけがましい解釈を加えて読者の前に提供すべきものではありませんから、一つには私にはまたこの「ついでのことに」を試みるより外はなかったのであります。私と読者との間には、

事実年齢の隔たりはあるにしても、私は今いったほどの範囲の外には、その点では凡そ配慮を用いることをしないでおきました。

詩は一本立ちの孤独な心で読むべきものです。私の解釈解説に多少はおしつけがましいふしがまじっているとしても、それは要するに諸君の取捨にまかせるために、あるいは諸君に別箇の考えを喚び起すために、そこに置かれているのにすぎないことは、もう断るまでもありますまい。

詩は各自めいめいの心で読むべきものです。しかしながらもしも幸に、傍らに同感同意者の声をきくならば、彼らめいめいの受とり方にもいっそうの力と感興とを加えることでしょう。もしも私の言説がある箇所で諸君のためにそういう機会となるならば、もとより私の望外とするところです。

この書物は、たださまざまの詩を、私という一箇の貧しい心に迎えて、さまざまに読みとったその一つの経歴書(それも紙数に限られて書きたらないところの多い)にすぎないようなものであるのは、先にも一言しました。ここにはただ一群の羅列があるばかりかも知れません。「詩とは何ぞや」そういう抽象的なないしは哲学的な問題には回避してふれないことにしました。私自身そういう問題にむかっては極めて無力なのを悟って

いるからであります。これは諸君の前に告白しておかなければなりません。さて、こういった後でいうのも何ですが、詩を理解することは、さまざまの詩をさまざまに読みとり受け容れることからまず始める必要のあることもまた事実でしょう。殊に初心の読者にはそれが必要でしょう。心を柔軟に精神を平らかにして、さまざまな詩人のさまざまな作品に虚心に従ってゆくことは何という楽しい遍歴でしょう。それが私の流儀です。私はこの流儀に諸君を限ろうとはしませんが、私はこの流儀をまず諸君に勧める者ではあります。

附記。本書の内容は、次に断る少しの部分の外は、一つの系列として一まとめに書かれたものであります。「萩原朔太郎の詩法の一面」はそれとは別に手もとに書きとめてあったものをここに充用しました。「夕ぐれの時はよい時」と「数人の詩人について」は、前者はある雑誌に、後者はある講座のために執筆掲載したものをここに再録しました。本書にあって少しく他の部分と文体を異にしているのはそのためであるのを断っておきます。

五月二日記

目　次

前書き
「千曲川旅情の歌」について……一五
「ああ大和にしあらましかば」について……三三
『有明集』の三章……四八
智慧の相者は我を見て(四八)——霊の日の蝕(五四)
——茉莉花(五七)
『邪宗門』の二章……六〇
邪宗門秘曲(六一)——謀叛(七一)
「漂泊」その他……七四
漂泊(七四)——秋和の里(八〇)——ふるさとの(八二)

——林檎の樹かげに(八四)——現身(八五)

口語自由詩について……九〇

雨にうたるるカテドラル(九二)——雨の詩(一〇〇)——雲(一〇二)——飴売爺(一〇三)——こんな老木になつても(一〇三)——秘密(一〇四)——母と子(一〇六)——落葉(一〇八)——京都人の夜景色(一〇九)——三郎といふびつこの犬とぼく(一一二)——秋思(一一四)——永久に(一一八)——よき友とともに(一一九)——都会の川(一二)——不思議なる顔(一二二)——水兵(一二四)——田舎女の航海(一二〇)——北見の海岸(一二六)——夜明け前のさよなら(一二九)——県知事(一四二)

一つの補足として……一四三

小曲(一四四)——ふるさと(一四五)——あやふきもの(一四六)——をさなかれとも(一四七)——病める蚕

(一四七)——夜の街(一四九)——友どち(一五一)——小春日(一五一)
萩原朔太郎の詩法の一面……一五三
山に登る(一五三)——再会(一五九)——小出新道(一六二)——さびしい人格(一六六)——猫(一六八)
夕ぐれの時はよい時……一七〇
夕ぐれの時はよい時(一七〇)——彼等(一八一)
数人の詩人について……一八五
丸山　薫……一八五
砲塁(一八五)——挿話(一八七)——家(一八八)——犬と老人(一八九)
竹中　郁……一九四
枇杷即興(一九四)——つばめ(一九七)——挽歌(二〇〇)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

田中冬二……二〇三
小さな山の町(二〇五)——沼べり(二〇六)——晩春暮夜(二〇六)——古風なガス燈の町(二〇七)——洋燈(二〇八)
津村信夫……二〇九
戸隠びと(二一〇)——はるかなものに(二一一)——月(二一三)——冬の夜道(二一五)
立原道造……二一七
わかれる昼に(二一七)——のちのおもひに(二一一)——眠りの誘ひ(二一三)——さびしき野辺(二一四)
中原中也……二二五
老いたる者をして(二二六)——夕照(二二八)——港市の秋(二二一)——正午(二二二)
伊東静雄……二三三
訪問者(二三三)——夕映(二三五)——自然に、充分自然

に（二三八）――詩作の後（二四〇）
萩原朔太郎……二四二
地面の底の病気の顔（二四二）――蝶を夢む（二四六）――
女よ（二四八）――静物（二五〇）
室生犀星……二五〇
寂しき春（二五〇）――秋の終り（二五一）――忘春（二五三）
――象（二五五）――つれづれに（二五六）――桃の木
（二五六）――駱駝（二五八）
堀口大学……二五九
朝のスペクトル（二五九）――その目（二六五）――砂の枕
（二六六）
解　説……（杉本秀太郎）……二六九

詩を読む人のために

「千曲川旅情の歌」について

千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす蘩蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺
日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com